

# 2040年問題

に せんよんじゅうねんもんだい  
2040年問題

2040年，从现在算起也就是20年后的未来。那时的日本，将会变成什么样的社会呢？或许有人会认为“那么久远以后的事和我们没什么关系”。不过，有些人也许刚好在那个年代迎来自己的晚年。另外，应该有很多人的儿女或是孙子辈会是支撑那个时代的社会的骨干阶层吧？有些问题非常希望上述的人们能预先了解。

在日本，有关少子老龄化问题从很久以前开始就一直被讨论。日本人口在2008年达到了顶峰，之后开始减少，老龄化率（65岁以上的人口）持续增高，至2019年为止，老龄化率达到了28.4%。平成的30年间是老龄化不断加剧的时代。这其中，2025年引起了人们的关注。这是因为，被称为“团块世代”——在日本出现婴儿潮时出生的人们，到了2025年将成为75岁的后期高龄者，这就意味着需要增加花费在医疗、护理等福利方面的预算。

但是可以预知，到了2025年这些问题并不会结束，因此必须着眼于之后的人口变化。根据“令和2年度版厚生劳动省白皮书——关于令和时代的社会保障和劳动方式的思考——”的统计，2040年将迎来老龄化的高峰。2040年，老龄化率（推算）将达到35.3%，相反，20岁至64岁的劳动人口将减少到总人口数的一半。

另一方面，平均寿命将持续延长。2019年男性是81.41岁、女性是87.45岁，而到了2040年，据说还会再延长大约两年。如果是这样的话，85岁以上的人口所占的百分比在1990年是

2040年、<sup>いま</sup>今から20年<sup>ご</sup>後の<sup>みらい</sup>未来、<sup>にほん</sup>日本はどんな<sup>しゃかい</sup>社会になっているだろうか？「そんな<sup>さき</sup>先のこと<sup>かん</sup>関係ない」と<sup>おも</sup>思う方もいるかもしれない。でも、もし<sup>か</sup>かしたら<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ろうご</sup>老後がその<sup>あたり</sup>あたりに<sup>く</sup>来る方もいるだろう。また、その<sup>ころ</sup>頃社会を支える<sup>さき</sup>中心的年代<sup>ちゅうしんてきねんだい</sup>になっている<sup>お</sup>お子さんや<sup>お</sup>お孫さん<sup>も</sup>を持っている方は、<sup>た</sup>たくさんいるのではないだろうか？<sup>そ</sup>そんな方<sup>たち</sup>たちに<sup>し</sup>ぜひ知って<sup>お</sup>おいて<sup>い</sup>いただきたいことがある。

日本ではかなり<sup>まえ</sup>前から<sup>しょうしこうれいか</sup>少子高齢化問題<sup>と</sup>が取り<sup>ざ</sup>ざたされている。2008年<sup>を</sup>をピーク<sup>に</sup>に日本の<sup>じんこう</sup>人口は<sup>げんしょう</sup>減少<sup>に</sup>に<sup>てん</sup>転じ、<sup>りつ</sup>高齢化率<sup>さいいじょう</sup>（65歳以上<sup>の</sup>の人口）は<sup>ど</sup>どん<sup>たか</sup>高まり、2019年<sup>ま</sup>までの<sup>たか</sup>高齢化率<sup>は</sup>は28.4%<sup>と</sup>となった。平成<sup>の</sup>の30年<sup>かん</sup>間は<sup>かん</sup>高齢化<sup>が</sup>が<sup>きゅうそく</sup>急速<sup>に</sup>に<sup>すす</sup>進んで<sup>い</sup>いった時代<sup>だ</sup>だ。そんな<sup>中</sup>中、2025年<sup>が</sup>が<sup>ちゅうもく</sup>注目<sup>され</sup>されてきた。2025年<sup>とは</sup>とは「<sup>だんかい</sup>団塊<sup>の</sup>の<sup>せだい</sup>世代」と呼ばれる、<sup>べ</sup>ベビー<sup>ブーム</sup>ブーム<sup>が</sup>が<sup>お</sup>日本<sup>に</sup>に<sup>お</sup>起こった<sup>とき</sup>ときに<sup>う</sup>生まれた<sup>ひと</sup>人<sup>たち</sup>たちが、<sup>こうき</sup>後期<sup>しゃ</sup>高齢者<sup>の</sup>の<sup>75</sup>75歳<sup>となり</sup>なり、<sup>いりよう</sup>医療<sup>、</sup>介護<sup>な</sup>など<sup>ふくし</sup>福祉<sup>にか</sup>かかる<sup>よ</sup>予算<sup>ぞうだい</sup>が増大<sup>する</sup>することが<sup>み</sup>見込まれて<sup>い</sup>いた<sup>から</sup>からだ。



しかし、問題は2025年<sup>に</sup>に<sup>お</sup>終わらず、その<sup>さき</sup>先の<sup>へんか</sup>人口<sup>のみ</sup>の変化<sup>を</sup>を見据えなければ<sup>な</sup>ならない<sup>こと</sup>ことが<sup>わ</sup>わかってきた。「令和2年度<sup>版</sup>版<sup>こうせいろうどうはくしょ</sup>厚生労働省<sup>はくしょ</sup>白皮书——令和<sup>はたら</sup>時代の<sup>ほしやう</sup>社会保障<sup>と</sup>働き<sup>かんが</sup>方を<sup>かんが</sup>考える——」によると、2040年<sup>に</sup>に<sup>たか</sup>高齢化<sup>の</sup>の<sup>ピーク</sup>ピーク<sup>が</sup>が<sup>く</sup>来る<sup>とい</sup>うのだ。2040年、<sup>たか</sup>高齢化率<sup>（</sup>（<sup>すいけい</sup>推計）は<sup>35.3</sup>35.3%となり、<sup>ぎゃく</sup>逆に<sup>20</sup>20~64歳<sup>の</sup>の<sup>しゅうろう</sup>就労世代<sup>が</sup>が<sup>ぜん</sup>全人口<sup>の</sup>の<sup>はんぶん</sup>半分<sup>に</sup>に<sup>まで</sup>まで<sup>げんしょう</sup>減少<sup>する</sup>するという。

<sup>いっほう</sup>一方、<sup>へいきんじゅみょう</sup>平均寿命<sup>の</sup>の<sup>つづ</sup>伸び<sup>は</sup>は<sup>だんせい</sup>伸び続け、2019年<sup>には</sup>には<sup>だんせい</sup>男性<sup>81.41</sup>81.41歳、<sup>にょせい</sup>女性<sup>87.45</sup>87.45歳<sup>だ</sup>だったのが、2040年<sup>には</sup>には<sup>さら</sup>更

1%，到了2040年将会增长到9.2%。

可以认为，在2040年老龄化将迎来高峰，之后会逐渐趋于稳定。另一方面也可以认为在超老龄者居多的社会，死亡率高，医疗和护理领域也将会面临更多严峻的局面。

此外，据估计，到了2040年，单身的老龄者还会进一步增加。这其中的理由不仅有与配偶者的离别、死别方面的，还预计到了终生单身（不结婚没有建立家庭）率也将持续增加。其他方面，也有子女对于与父母同居的意识的变化（不希望同居者有所增加），也就是说即使是到了后期高龄者（75岁以上）的年纪，还依然是独居的情况也会增加。



另一方面，护理保险制度已经扎根于社会，老龄者自身的想法也发生了变化。根据1986（昭和61）年的意识调查，有关老龄期的生活，在生病等的护理方面，作为“起重要作用的存在”，70%以上的人选择“家人”；而在2016（平成28）年的意识调查中“想在什么地方、接受什么样的护理”的问项中，选择回答最多的是“如果有可以不依靠家人能够生活的护理服务，希望在家里接受护理”，占37.4%。其次是“希望在自己家里接受以家人为中心的护理”、“希望在自己家里接受家人护理与外部的护理服务相结合的护理”，各占20%。想住进付费老人院或是附带护理服务的老龄者住宅、入住特别养护老人院等的想定的回答，加起来约占20%。这说明，不仅仅是依靠家人，而且以利用护理服务为前提的想法也已深入人心。

创造出支撑这样的一个社会的财源的劳动力人群，按照计算，2010年是2.6人的劳动力抚养一位老龄者，而到了2040年，就必须是1.5

に約2年延びるのではないかとされている。そう  
なると85歳以上が占める割合も1990年の1%か  
ら2040年には9.2%となる。

2040年には高齢化は一旦ピークを迎え、以降は  
落ち着いていくと考えられるが、超高齢者が多  
い社会では、死亡率が高まり、医療や介護現場では  
より深刻な場面が増えていくと考えられる。

また、2040年には高齢者の単独世帯がさらに増  
えるだろうともいわれている。理由は配偶者との  
離別、死別もあるが、生涯独身（結婚しないで  
家庭を持たない）率が増えていくことが見込まれる  
からだ。ほかにも、親と同居することへの子世代の  
意識の変化（同居を希望しない者が増えた）もあ  
り、後期高齢者（75歳以上）になっても単身の時  
が増えるというわけだ。

また、介護保険制度が社会に定着してきたこと  
もあり、高齢者自身の考え方も変わってきている。  
1986（昭和61）年の意識調査によれば、高齢期の  
生活に関し、病気などの介護において「重要な役  
割を果たすもの」として、7割以上の方が「家族」  
としていたが、2016（平成28）年に「どこでどのよ  
うな介護を受けたいか」を尋ねた意識調査では、「家  
族に依存せずに生活ができるような介護サービス  
があれば自宅で介護を受けたい」が37.4%で最も  
多くなっている。次いで「自宅で家族中心に介護  
を受けたい」、「自宅で家族の介護と外部の介護サー  
ビスを組み合わせる介護を受けたい」がそれぞれ約  
2割、有料老人ホームやケア付き高齢者住宅へ  
の住み替え、特別養護老人ホーム等への入所を  
想定した回答が合わせて約2割となっている。家  
族のみに依存せず、介護サービスの利用を前提と  
する考え方が浸透してきている。

このような社会を支える財源を作り出す就労  
世代は、2010年には2.6人の就労世代が一人の高齡

人的劳动力抚养一位老龄者。可以认为在这样的人口结构的社会里，由劳动力人群来抚养老龄者本身就会变得很困难。此外，如果这种状况持续下去，医疗、护理等的福利领域方面的人手短缺问题也会变得愈发严峻了。

面对这种局面，作为劳动力人口，政府提出了女性的活跃、退休年龄的延长、推进退休后的老龄者的就业的策略，甚至还提出了“女性活跃社会”以及“终生工作的社会”等的口号。但是，迫于需要，即便是到了高龄也要坚持工作“终生工作”，并且在女性可以活跃的社会基盘尚未准备好的阶段的“女性活跃”，究竟有可能实现吗？再进一步说，即使是提高了女性和高龄者的就业率，从长远来看，就业者人数的减少依然是不可避免的事实？

基于以上原因而推进的是接受“外国人劳动者”。只是，对于接受外国人，尤其是对于作为与医疗以及福利这些重要领域有关的人材，也就是对于作为中长期支撑日本社会的人材的引入，这些方面的接受准备有没有做好呢？

如此看来，面向2040年还有很多需要一步步进行准备的事情。随着我们从未经历过的超老龄化社会的到来以及人口的减少，社会的现实状况要求我们做出改变，这也包括日本社会将如何发展下去这方面的价值观的改变。

2040年问题不是遥远的未来。可以说，现在正处于变化过程以及为顺应变化而要做好准备的过程。



※统计数字参考了“令和2年度版 厚生劳动白皮书—关于令和时代的社会保障和劳动方式的思考—” (bab)

者を支えればよいという計算だったが、2040年には1.5人の就労世代が一人の高齢者を支えなければならなくなるという。このような人口構成となった社会では、高齢者を就労世代が支えるということ自体が難しくなっていくと思われる。また、医療や福祉の現場での人手不足も、今のままでは深刻なものになってしまうだろう。

そのような中で政府は働き手としての女性の活躍や定年の引き上げ、定年後の高齢者の就業を進め、「女性活躍社会」や「生涯現役社会」などというスローガンまで出してきたが、必要に迫られて高齢になっても働き続ける「生涯現役」や、活躍できる基盤整備のなされていない段階での「女性活躍」は、果たして可能なのだろうか？さらに言えば、たとえ女性や高齢者の就業率が上がったとしても、長期的に見れば就業者数の減少は避けられないのではないか。



そこで進められているのが「外国人労働者」の受け入れであるが、特に医療や福祉という重要な分野に関わる人材として、中長期的に日本社会を支える存在として、受け入れる準備は進んでいるのだろうか？

このように見てくると、2040年に向けて準備していかなければならないことはたくさんある。今までに経験したことのない超高齢化社会の到来と人口減少の中で、日本社会はどのように生きていくかという、価値観も含めた変化を求められている。

2040年は遠い未来の話ではなく、今もその変化と準備の過程にあると言える。

※統計数字は「令和2年度版 厚生労働白皮书—令和時代の社会保障と働き方を考える—」を参考にした。(bab)